
刺身のつまにもなりゃしない小噺集

麻戸 槩來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刺身のツマにもなりやしない小嘶集

【Nコード】

N4742V

【作者名】

麻戸 槩來

【あらすじ】

短編にしては短いし、物足りない…？「何事も足りなくらいがちょうどいい」をコンセプトに、思いついたままの状態で載せていきます。ある日、ある場所の男女の様子、共に覗いてみませんか？基本恋愛ものに偏るかと思いますが、雑多に載せていこうと考えていますので、よければお付き合ってください。

執事とお嬢さまが登場する『私は、すべてを手に入れることは出来ない』をリメイクして公開中です

愚かな少女と秀麗な少年（前書き）

今回は、ある日ある場所の男女の会話となっています。

愚かと呼ばれる少女と、秀麗と言われる少年。
相容れぬはずの男女が織りなす会話。

愚かな少女と秀麗な少年

『君はどうしてそんなに簡単に人を信じるんだ』

「だって信じなければ、誰も信じてくれないでしょう?」

『信じた結果がその様ようだろう?』

『いい加減に学んだらどうなんだ』

「私はいつも学んでいるわ。」

「こんなにも今、貴方を愛おしく思えるのももの」

『それが、そもそも間違いだというんだ。こんな奴に惚れて、何が楽しい。』

『もっと他にいい男などゴロゴロいるだろう』

「私の中では貴方が一番よ」

『いや違う。君の中では俺以外の選択肢を抹消しているだろう』

「それがどうしてダメだというの? 貴方を知ったら、他の人なんて目に」

入らなくなってしまったの」

『君は何もわかっちゃいない、俺ほど狡賢さうめいい奴はいないんだ。』

君だって例外じゃないんだぞ。蜘蛛のように絡めとって、ジワジ

ワその

綺麗な体も、可愛い顔も全て全て喰らってしまうんだ』

「あら、私を食べたいと思ってくれるなんて嬉しいわ」

『ほら、またそついう事を言って俺を試しているんだろ？

ああ、食べたいさ。ずっと我慢していたのなんて、お互いに分かって

いたはずだ。』

愚かな少女と秀麗な少年（後書き）

「貴方ほど滑稽な人なんて知らないというのに
みんな馬鹿ね」

『全くだ』

事情も知らず、周りでやいのやいのと嘸はやし立てる人間の
何とも愚かで愛しき事。
表面をのぞいているだけじゃなく、もっと奥まで掘り進めて見なさ
いな。

きつと貴方の隣にいる友人ですら…
貴方の知らぬ、ほかの顔がそこにはあるはず。

最低な片想い（前書き）

今回はちょっと長めですが、細かい設定などは省いている為、こちらに乗せる事にしました。

誤字を直すとともに、タイトルを変更しましたが内容に変わりはありません。紛らわしくてすみません。

最低な片想い

ある日、恐れていた事が起きてしまった。
彼の優しさが、とうとう煩わしくなってしまったのだ。
それを伝えると、彼はいかにも理解できないと言った表情をした。

「どうして？」

君のために、こんなに頑張ってきたのに…

君が望む限り傍にいてあげるよ」

何も分かっていない彼が、言葉を連ねる。

けれど最早、そのどれも私の心に届きはしなかった。

「頑張つてこられたのが嫌で、嫌でたまらなかったの。

だってそれは私が望んだからでしょう？ 貴方がしたくてした訳ではないので

しょう？ 貴方のためなんかじゃない…ただの同情みたいなもの」

「そんな事ないよ

俺は君の事が心配だっただけ」

「それが同情だっていうのよ

私は必要とされたかったの」

珍しく、私が事細かに説明しているのに、やはり彼は理解できないと言った顔を崩さない。まるで、さも私がおかしい事を言っていると云った様子だ。

「わかんないよ、そんなの…どこが違うの？
我慢しないで俺の前で泣いていいのに」

また、彼は悪魔の様な事を口にする。
あんなにも仲のいい彼女がいて、私の事を女とも思っていない彼の様子に、
本当に苛立つ。

大体、彼の前で不覚にも泣いてしまったのは片手で足りるほどなのに、さも
何でも知っていると云った表情をされるのに、腹が立つ。

あんたが、私の何を知っているのよ。

「そんなのまつぴらごめん。なぜ自分を理解もせず、置いて行く
としている

人の前で弱みを見せなきゃいけないのよ」

そう。この男は転勤することが決まり、愛しの彼女を連れて引越
するのだ。

だから、きつと彼と会うのもこれで最後。

「俺はただ

君に優しくしたかっただけなのに…」

まだそんな事を言っている…。

確かに貴方は誰にでも優しい、最高の友人だったよ。

けれど、叶わない片想いの相手としたら、最悪だった。

何度、隠れて泣いたか貴方は知らないでしょう？

貴方が彼女と、目の前で微笑ましい会話をしている時ですら、私の心は鬼か蛇じゃにでもなつた気分だった。

その癖、落ち込んでいると目ざとく見つけて…。

たとえ慰めるためとはいえ、抱きしめるのはやりすぎだよ。

あんたみたいないい男、惚れないと思っっているほうが馬鹿なのよ。
だから、もう友人でいる事なんて無理だから、ここで終わりにしよう。

「ねえ

その優しさ、優しくないよ」

どしせなら、

もう期待もできないくらいに、傷つけて…。

最低な片想い（後書き）

優しさと同情の境界線、間違っただのはどちらが先…？

お付き合いいただき、ありがとうございます。

「乱心の勇者様

「俺が、君を苦しめるものをすべて片っ端から壊していったら
きつと君は怒るよね…」

「何を馬鹿な事を言っているのよ、あんたは仮にも勇者様でしょ」

俺が考えているまま口にしたら、隣にいる少女に怒られてしまった。
何故、あんな屑どもに優しく、俺には厳しいのだろう。

…表面的な作り笑いをされるよりよっぽどいいのだが、もう少し笑
顔を向けて
くれてもいいと思う。

「だつてえ。ちょっと利用された俺達でも腹が立つのに、君は家族
を人質に
ずっと脅されているんでしょ」

それを聞いたときは、魔物より先にあいつらの首を落としてやろう
かと考えた

ほどだ。俺のお気に入りに手を出すなど、100年どころか100
0万年早い。

そんな俺の気持ちを知りもせず、彼女は俺に反論する。

「だからって、大した事を私はしてないわよ」

「そうだね。居もしない魔王を倒すため、魔物たちと戦う俺たちの後ろを」

ちよこちよこ君はついてきたただだ」

巫女と崇められていても、少し回復魔法が使えるだけで、自身を守ること

すらできない彼女。それでも、神聖なものと国民に思わせて、さらに彼女を利用しようとしているのが分かるのだ。

「ちょっと、あんたケンカ売ってんの？」

「まさか、そんなことしないよ。」

ただ、あまりに君の扱いがひどいと感じただけさ」

?
?
?
?
?
?
?
?
?
?

だから壊したいと感じただけ

事もなげに言う、この男は何なのだろう。

確かに、悪政だと評判の悪い国王たちの策略で魔物たちを統べるもの。

魔王という存在を作り上げ、恨みをそちらに向けさせている

だからといっても、彼も分かっているように私にはなんの力もないのだ。

それで何かを望めというほうが、酷だと思っただが…。

私をこんな状況に追い込んだ人間たちに恨みがないとは言えないが、少なく

とも勇者を含め、一緒に旅しているみんなには感謝している。

戦闘では何の力にもならない私を、いつも必死に守ってくれて、過保護と

言えるほど気遣ってくれているのが分かる。

それだけで充分だと思わなければ、きっと罰が当たってしまう。

…だからいいのだ。

「 私は、だいじょうぶよ」

彼がこんな言葉で満足するかわからないけれど。

そう言ってほほ笑むしか出来なかった。

「乱心の勇者様（後書き）」

君は何も分かってない。

俺たちは君が望みさえすれば、この世界だって与えてあげるのに…。

（この湧き上がる衝動を考えたら、一番魔王にふさわしいのは、俺
かもしれない）

貴方だけに許した、不可侵領域（前書き）

しばらくパソコンの調子が悪く、作品を投稿できなかつたストレス
?で、昔の作品をあげてみました。その為、他のものと少し作風が
異なるかもしれません。R指定は入りませんので、あしからず。
タイトルのみ、変更させていただきました。

貴方にだけ許した、不可侵領域

私のまぶたにキスする人はもういない…。

もう、春なんて穏やかなものじゃない。

もう、夏なんてにぎやかなものじゃない。もう秋なんて…。冬なんて…。

日本が誇る季節なんて、もう素敵じゃない。何かが変わったただけで、こんな事を

思うなんて馬鹿としか言いようがない。そんな事は分かってる。

でも、確かにここに記憶があるのだ。

口下手なあなたの、少し変わった愛情表現であるまぶたへのキスも、些細な事にも激しく動揺してしまうような、愛しい記憶がありありと浮かんで

くるのだ。春は一緒に『春眠暁を覚えず』何て笑いあって、ごろごろ寝転がって

いたよね。夏は慣れない浴衣を着て、一緒に花火を観に行ったよね。秋は？冬は？あの頃は…。

私はとても臆病で、異国に旅立つ貴方の背中をずっと追いかけるなんてこと

とてもじゃないけど出来なかった。

絵を描いて食べていこうだなんて、夢みたいなことを言うあなたの背中をずっと信じているなんて…できなかつた。

大学で初めて会った時に、私にあなたは死んだ目をしていると言った。

それが今でも忘れられない。

なんて失礼な奴なんだ！というか、そう言う事を初対面の人に言うなんて、人間

としてどうかと思う。

けれど今考えてみると確かに、私はそ

んな目をして

いたのかもしれない。

屋上の手すりで、空を睨み付けるように眺めていたのだから…。

それでも、あなたには一つ訂正しておかなければならない事がある。私は決して自殺なんて考えていた訳ではなくて、ただ青く広い空が少し憎らしく

なって、睨み付けていただけなのだ。

青くて広くて、何より自由で…。羨ましくってたまらなかつた。

そんなやり取りも忘れかけていた頃に、私は一枚のある絵に出会った。

出会ったなんて言うと、あなたは大笑いだと笑うかもしれないけれど、私に

とっただけの衝撃があったのだ。

黒などの暗い色を使っているのに、それは絶望どころか、未来への希望を表現

しているように思えて。… なんとというか、今の私にはぴったりだったのだ。

すべての事に絶望なんてしていない。

だからと言って、夢を素直に語れるような心境でも、性格でもない。

それをうまく絵という形で表現してもらったようで嬉しくなった。

名前も一応

チェックしておいた。大学で人を捜すなんて無謀だとは思っただけ、ただ、またこの人の絵を見れたのならば、私は意味もなく幸せになれるだろう

という、奇妙な確信を持ったのだ。

そして、この作者が以前に会った失礼なあなたであると知った時、

私は本気で

落ち込んだ。

今だから正直に認めるけれど、確かに私は少し、運命的なものを夢見ていた

のだと思う。友達にわざわざ聞いてまで捜すのではなかった。最初は本当にそう思って後悔していた。

そんな私を知ってか知らずか、あなたとはよく顔を合わせていたね。会うたび、会うたび、あなたを意識していた。でも私はそんな自分自身ですら無視して、分からないふりをしていた。

何といつても、私は今まで自分からちゃんと人を好きになった事じゃなかったのだ。第一、こんな不器用な優しさしか知らない人を、好きになるなんて思いもしなかった。

それでも、私の意志など全く関係ないというように、私はあなたに惹かれていった。あなたがあの時に告白してくれなかったら、私は何も出来ずに大学も卒業し、職に就いていただろう。適度に合コンをしたり、恋人が出来たりもしたと思う。

けれど、あなたを想うほどに人を好きに離れていなかったと思う。

あなたは少し言葉足らずで意地悪だったけれど、しっかりとした意思を持ち、

本当の優しさを知っている人だった。

ただの甘やかashiではない、欲しい時にある腕と言葉。

それだけで私は幸せだったのに、あなたはさりとそんな日々を捨ててしまった。

あなたは…あなたの夢をとってしまった。

私の夢は、あなたとでなければ叶えられないものばかりで、あなたの夢は、私なんていなくても大丈夫で。

私はあなたが四年の春に、海外に行くと言った時に目のまえが真っ暗になってしまった。思考も止め、少しでも最低な結末を迎えないように耳をふさぎ。只管あなたに縋りつくか、罵るかしかなくなってしまった口を動かして続けた。

辛さと疲労が頂点に達した時、私はもう何もかもを止めてしまった。…あなたの事は、もう諦めなければいけない。あなたが海外で成功し、幸せになる事を心から願わなければならぬ。

例えあなたの隣にいるのが、私でない誰かだとしても。

私の選択の中には、あなたと共に海外に行くという選択肢がなかったのだ。

いや、もしかしたらずっと気付いていて、わざと無視をしていただけなのかもしれない。

あなたを信じ切れずに、あなたの事ばかりを責めて私を、とても醜くて汚い

生き物のように思ってしまったよ…。

あなたは夏にはもう海外に旅立っていた。

自分を責めるだけで、話も聞こうともしない私にさぞ嫌気がさしていた事
だろう。

…あなたが居なくなってから聞いたのだけれど、『あの黒い絵』は
私に会って
から描いていたのね。

それを聞いた時、私は嬉しくて悲しくて涙を流したよ。

嗚呼、あなたはあの日、私がどんな気持ちでいたのかを理解してく
れていた。

口で言うのは簡単だけど、違うやり方でその事を…。『理解してい
る』と伝え
ようとしてくれていたのね。

私はなぜそんな事に気付かずに来てしまったのだろう。後悔…なん
て言葉じゃ
とても足りない。

今でも雑踏の中であなたを捜しているの。居る訳ないのは分かって
いるのだけ

れど、そうせずにはいられなくて…。

いつか私も、あなた以外の人を愛する日が来るかもしれない。
でも、せめて私のまぶたに残る…あなたの温もりが。決して忘れ去
られる事の
ないようにと、願っているよ。だからもう。

私のまぶたにキスする人はもういない…。

貴方にだけ許した、不可侵領域（後書き）

不器用なあなたの愛情表現は、いつしかあなたの癖になっていた。

「そんなことじゃ誤魔化されない」とあの頃は怒っていたけれど、今は、そんな癖すら愛しくて恋しくて堪らない。

ねえ、お願い。

もう一度困ったように微笑んで、私のご機嫌取りをして…？

（叶わぬ願いを、今も捨てられずに私はいる）

タイトルころころ変えてすみません。いいタイトルが一度で浮かばなくて、思考錯誤してます。

いつそ宝箱に僕を閉じ込めて、一緒に燃やしてほしかった（前書き）

こちらは、随分前にある歌に影響されて書いたものです。
突然現れた生きたお人形と、少女の話。

すみません、暗くタイトルのみ変更しました。

いつそ宝箱に僕を閉じ込めて、一緒に燃やしてほしかった

病気になって、どれだけの事を諦めただろう…？

様々な事を諦めて、羨ましがっていた私の前に現れたあなたは、確かに私の希望

だった。動いたり話したりと不思議なお人形だったけれど、彼は私に多くのものを与えてくれた。

だからもう…此処で開放してあげるね。

「ねえ約束よ。

私が死んだらほかの誰かを幸せにしてあげてね。

あなたがいてくれて私は本当に幸せだったんだから」

「ぼくがきらいなの？」

だからそばにいさせてくれないの？」

「そんな訳がないわ。

本当にあなたが好きだったんだから

でも、一緒には連れて逝きたくないの」

そう、このままでは共に火葬場までついてきそうなんだもの。

もう先がない私には、こんな形でしか彼を救えない。

「うそはやめて…。」

もうひとつようなくなっただんでしょ？

きみがやさしいのはしっているよ。

でも、だったらそのやさしさをさいごまでちょうだい」

『それだけは駄目。』

いくら大好きなあなたのお願いで聞けないの。

もう私のことなど気にせず幸せになってね。』

「いやだ。」

きみがいないところでなんていきたくない。

いつまでもいっしょがだめなら

せめてきみのからだのちかくにずっといさせて」

『そんな事したらあなたの幸せがなくなってしまっわ。』

ほら、いい子だから聞き分けて。』

「ぼくはずっときみだけを好きでいるよ」

『…ありがとう、でもねスピーナー、』

「あいしつづけてもいいでしょ？」

『……愛しているわ』

そしてまた私は、あなたを縛り付けてしまう…。

病気がちな私にもたらされた、唯一の救いだったのに
助けてくれた恩人であるあなたの事も、私は幸せにする事が出来な
いのね…。

?
?
?
?
?
?
?
?

やさしいあの娘をこまらせて、ボクはまたひとつ、きたなくなつた。
ずっとボクを…ひたすら、やさしくてかわいいそんざいだと。
しんじつづけたかわいい娘。

きみに独占されるのなら本望と。

あなたのねがいなら、なんだってかなえてあげたいけど

きみを忘れる、だなんて例えうそでも了承できなかつた…。

はかない命と知りながら、どうしても欲しいと無理を言ったのはボクのほう。

動いてしゃべる、きみのような人形であるぼくを
こころの底から好いてくれたのは、きみだけだった。

いとしい、いとしいかわいい人

ヒトという存在に、ここまで関心をもったのは、じつは初めてだったんだ…。

今までも、これからも。きっとあなた以外は愛せないから。

永遠につづく時のなか、あなたを想う心は

きみ自身にすら邪魔させない。

そばにいるよと言ったのに、うそを吐いたのはあなたのほう…

いっそ宝箱に僕を閉じ込めて、一緒に燃やしてほしかった（後書き）

お願い、ぼくを置いて逝かないで…

宝箱に入れているのだから、とても大切なものでしょう？
大切だったら、共に連れて行ってくれるでしょう？

私は、すべてを手に入れる事はできない(前書き)

こちらは以前短編として掲載していたものを手直ししたものです。お互いの心情と発言を分けている為、読みにくいかもしれませんが、予めご了承ください。

私は、すべてを手に入れる事はできない

「お嬢さまサイド」

十数年と私に仕えてくれた彼の言葉で、唐突に私は理解した。

そう、わかった。

「もう解放してあげる」

好きな処トコロへ自由に行きなさい。
最後さいごぐらいは、笑顔で見送ってあげるから。

「今までありがとう」

貴方が私の言うことをきいてくれる度に、二人の距離を見せつけられるよう

で、本当はとても辛かった。

それでも私は。……貴方の傍にいられて幸せでした。
こんなに幸せを感じることは、もうないだろうけど……。

そんなことはどうでもいいの。

これ以上、貴方に嫌われるくらいなら

こんな関係

「もういらない」

〔執事サイド〕

何気ない会話をお嬢さまとしていたはずなのに、彼女に言われた突
然の一言で

頭がわきあがるような感覚を味わった。

どうして、そんな事を突然言い出したのか分からなかったが、ある
仮説が思い
浮かんだ。

嗚呼、そうか。君は誰かを愛したんだ。

そうだろうか？

だから俺から、逃げようとしているのだろうか？

どこか感情の読めない表情が、猶のこと腹が立つ。とても長年仕え
ていた、

重要な存在に別れを切り出している顔ではないだろう。

「ふざけていらっしやるのですか？」

君が喜ぶなら、なんだってしてきたし。

この湧き上がる欲望だって、必死に封じてきたというのに…。

君専属の世話係になるまで、俺がどれほど努力したと思っているんだ。

異性という立場では専属の座を勝ち取るのは非常に難しくて。

お嬢さまの護衛兼、世話係ということで、ようやく君の傍にいられるようになった。

それなのに、二人の関係が邪魔だった？

馬鹿を言うな。俺という番犬がいたから、君は誰の物にもならずいたんだ。

数多あまたいる害虫どもを蹴散らしていたのは、他でもない俺だということ

君が知る訳がないのは分かっているが、さすがにこの台詞には腹が立つ。

誰が、離れてなどやるものか。

「これからもよろしくお願いします」

俺のものにする為に、こんなにも甘やかして…大切に大切に育ててきたって
ことにいい加減気付けよ。

…お陰で本当の主人である彼女の父親には、苦笑されてばかりいたが。

『お前は世間の親馬鹿よりも、よっぽどあの娘を甘やかしているな』
そんな言葉をかけられるのはしょっちゅうだった。

だが、その主人も今ではないんだ。
身内を亡くし天涯孤独となった君に、俺以外のだれが必要だということだ。

「貴女には
私だけいればいいんですよ」

私は、すべてを手に入れる事はできない(後書き)

I can't have everything.

訳：私はすべてを手に入れることはできない、どれかは捨てないといけない

すべて、めでたしめでたしという訳にはいかない

以下、本文中の会話のみ

「もう、解放してあげる」

「ふざけていらっしやるのですか？」

「今までありがとう」

「これからもよろしくお願いします」

「もういらない」

「貴女には

私だけいればいいんですよ」

読みにくい文を、最後まで読んで頂きありがとうございますとごさいました。タイトルは、英語が苦手なくせに、辞書から借りてきました。

彼の御方を愛しすぎた娘（前書き）

勝手な考えのもと描いておりますので、不快な思いをした方がいらっ
っしゃったらすみません。

彼の御方を愛しすぎた娘

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい
もう近寄りませんから

悪い事などしたいとも思いません

貴方の負担になる事などいたしませんから

許して下さい…神さま

ああ…どうして。

どうしてあんな仕打ちを受けてまで、逢いたくなるのは貴方だけの
のだろう。

身近な存在であるから、神である貴方を愛した訳ではない。

生まれてからずっと、私は盲目的にあの御方を愛し続けてい
たの。

普段から、特別あの方に目をかけて戴いていたのは知っていた。私
はそれが嬉し

くて、優しく笑って下さるのに甘え、何時もあの方にくっ付いて過
ごしていた。

そんな私の態度が気に入らなかったのだろう。周囲の反応は冷たい
ものだった。

当たり前だ。博愛の精神を教え、説く御方が鼻糞などしていい訳が

ない。

だから私は、あの御方に優しくされる代わりに彼の周囲の人には馬鹿にされ、

ゴミのような扱いをされていた……。彼の目を盗んでは転ばされ、時にはごみを

頭からかけられたりもした。

もっと酷い事をされたことがあるけれど、今更そんなこと思い出したくもない。

……あの人たちが言うところによると、私の存在は彼にとって邪魔以外の何者でもないらしい。

そう言われる度に何時も落ち込んではいたけれど、そんな言葉をかけられるのは

初めてではなかった。ずっと言われ続けていたから、私だって本当は邪魔なの

ではないかと考えたこともある。

あの方の役に立てたら、少しでも嬉しいと何時も思っていたけれど……私にする

ことなんて所詮いつも空回り。それでも私が傍にいる事で彼が笑ってくれるの

なら、たとえ周囲のいう通りだとしても、それでいいのだと思っていた。彼の

周囲の人にあの事を伝えられるまでは。

まさか彼自身ですら、私を煩わしいとしか認識していなかったなんて考えも

しなかった。

何時も私に向けてくれていた頬笑みは、本物ではなかったのですね…。

だけど、ありがとう。

貴方から直接そんな事を言われたら、きっと私は泣いて貴女にすがってしまった

と思うから。せめて最後だけでも、きれいに終わらせてくれてありがとう。

愛しているけれど、誰よりも大切であるけれど…。

私は、もう二度と

貴方の瞳に映らないことを、神に誓います。

彼の御方を愛しすぎた娘（後書き）

『純粋な神様が堕ちる時』と対になっております。

どちらかというと、そちらの方が気に入っているのです、目を通していただけると嬉しいです。

純粋な神様が堕ちる時（前書き）

『彼の御方を愛しすぎた娘』の対になっております。
少々きつい表現をしていますので、お気を付け下さい。

純粹な神様が墮ちる時

あの娘を返せ、誰にもやらん

あれは俺のものだと言っているだろう

うるさい、黙れ

話を聞くのは、あの娘をこの腕に抱いてからだ

愛しいあの娘が地上へ行ってしまった。

最初は何故、そんな事になったのか理解できなかった。

しかし、どうやらあの娘が僕の傍にいと、僕にとって悪影響があると周りが

騒ぎだしたせいらしい。

愛しいあの娘が地上に墮ちた。

何よりも守るべき高貴な僕を汚そうとしたのが罪状らしい。馬鹿らしい事だ。

出逢うまでは感じた事もなかった充足感。今すぐに触れられる距離にいないと

知った時の、恐ろしいまでの飢餓感。

これが穢れているというのなら、人間など塵以下だ。

僕は怒った。

こんな怒りを感じるのは生まれて初めてなほどに頭に血が上り、す

べてが煩わ

しく、且つ憎たらしく思えた。彼女を僕から奪った奴らも、僕から簡単に

離れた彼女へ対してまでも、怒りはとめどなくすべてを呑み込んでゆく。

周りの大馬鹿者たちは、すぐさま楽園から追放してやった。

かわりに僕は従順で、決して彼女を傷付けないだろう奴らを用意した。

もちろん、僕たちが再び戻ってきたときに少しでも邪魔しないように教育してから。

彼女へ対する怒りはもちろん消えることはない。

でも、それはどちらかと言うと、僕の元から簡単に去る決意をした事であって

可愛さ余ってという感情だった。…だから、彼女が二度と傷ついて離れていく

事もないように、細心の注意を払おうと考えたんだ。大体、僕以外の奴が

彼女をいじめていたなんて、本当に我慢できないんだよね。

なのに…それなのに迎えに来た僕を見て、彼女は驚愕に顔を歪め、僕から

走り逃げた。愛しいあの娘は僕から逃げたから…。

癪に障ったので掴まえて、もう二度と勝手に離れないように天上に連れ帰り、

地上との道を絶ってしまった。

愛しいあの娘が僕を見ない。

だから嫌という程、彼女に対する愛と執着心を叩きつけた。
体にも心にも、決して僕を忘れないように。何時までも僕を求め続
けるよう

にと、願いをかけながら。

きっとこれで、漸くみんな解ってくれらることだろう。

この狂鬼は、元からこの胸で飼っていたのだと。

純粹な神様が堕ちる時（後書き）

不快に感じる方がいらっしやったらすみません。

知識が浅い私が語るのはお門違いかもしれませんが、悪魔と恋に堕ちるとかなら悪魔あいてがその気になったら大丈夫な気がしますが、神様とは恋は出来ないだろうな！と勝手に考えています。

愛なら大丈夫かもしれませんが、恋をしたなら博愛主義。また、異なるでしょうがフェミニストな人が相手なのは正直つらいですね。何より、周りが許さないのではないかと思えます。優しさは心地よいから好まれるけれど、その人が欲や妬み憎しみを誰かに向けていたら、大概の人が嫌悪するのではないかと感じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4742v/>

刺身のツマにもなりゃしない小噺集

2011年10月6日12時52分発行